JAIST Repository
https://dspace.jaist.ac.jp/

Title	人類学の外部環境から考える人類学の可変性と可能性:ビジネスと工学系学問を視野に
Author(s)	伊藤，泰信
Citation	科学研究費助成事業研究成果報告書: 1-6
Issue Date	2018-06-22
Type	Research Paper
Text version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/10119/15385
Rights	
Description	基盤研究(C)（一般），研究期間：2014～2017，課題番号：26370947，研究者番号：40369864，研究分野：文化人類学

JAIST
JAPAN
ADVANCED INSTITUTE OF
SCIENCE AND TECHNOLOGY

Japan Advanced Institute of Science and Technology

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成　３０　年　　６　月　２２　日現在

機関番号：　１３３０２
研究種目：　基盤研究(C)（一般）
研究期間：　2014～2017
課題番号：　２６３７０９４７

研究課題名（和文）人類学の外部環境から考える人類学の可変性と可能性:ビジネスと工学系学問を視野に

研究課題名（英文）As seen from the outside: Considering the future possibilities of anthropology from business and engineering perspectives

研究代表者

伊藤　泰信（ITO, Yasunobu）

北陸先端科学技術大学院大学・先端科学技術研究科・准教授

研究者番号：４０３６９８６４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,700,000円

研究成果の概要（和文）：文化人類学（以下、「人類学」と略）は、対象の変化・変貌によって時代時代でその姿を変えてきたと言って良い。今後も、社会（外部環境）の変化にアクチュアルに対応して知識産出モードを変えていく（いかざるをえない）ことに鑑み、本研究は、人類学を取り巻く外部環境（とりわけビジネス実務および工学系学問などの他領域）と人類学との関係を考察しつつ、将来の人類学のカタチの可変性と可能性を提示することが目的であった。その成果は、学会発表や論文、更なるプロジェクトの組織化などへと展開している。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this research was to investigate the influence of logics external to the discipline on today's anthropological practice, and explore the discussion on how a discipline (i.e. Japanese anthropology) has been changing its mode of knowledge production in accordance with trends in Japanese business contexts. This line of inquiry can also be described as a kind of sociology of knowledge or the sociology of a changing discipline. Through examining the subject, the author made a further exploration into the variabilities and possibilities of anthropology. The results of this research came to fruition in the form of papers, theses and the organisation of further projects and research groups.

研究分野：　文化人類学

キーワード：　エスノグラフィ　工学系学問（HCD/UCD）　人類学の可変性と可能性　人類学教育

１．研究開始当初の背景

本研究は、平成 23（2011）年度採択の「ビジネスと人類学に関する実践的・メタ人類学的研究：日英米の国際比較の視点から」（基盤研究(C)、研究代表者伊藤泰信）の主題を発展・拡張させ、新たな課題に接続させたものである。企業に属する研究者・実務者が、エスノグラフィという人類学的手法を、製品開発、デザイン、現場の改善などのツールとして“開発”、“普及”し始めている。たとえばマーケティングにおいて消費者の行動や認知をより深く知るための実務ツールとしての活用が一例である。人類学的手法が、産業界・ビジネス界において（人類学の外部で）どのように活用されているかを、人類学者が観察しようというのが主題であった。

申請者の問題意識は、日本の人類学界が「よそのこと」（人類学の外側で生起している、学術的には意味のない事象）として関心をまったく払っていなかったエスノグラフィのビジネス応用・事業化、という事態を正面から分析対象しようとするものであり、人類学的手法を取り入れつつある産業界・ビジネス界の動向を、人類学という知の幅を押し広げる可能性を持つものとして積極的に捉え返そうとするところに、その学術的な独創性があった。

２．研究の目的

本研究でも、(1)人類学という学の外部環境（産業界・ビジネス界）で生起しているそのような現象を調査することを目的の１つとしており、そこに特色がある。さらに、本研究では、学問における他領域、すなわち(2)工学系学問における人類学的手法（エスノグラフィ）の応用へと、考察の対象を拡張する。加えて、(3)人類学の将来的な教育ないし人材育成のあり方を検討する。それは、単に人類学を学んだ学生の職域の拡大といったプラクティカルな問題にとどまらず、社会における将来の人類学の可能性・可変性を論じることでもあり、理論的に、変わりゆく学（人類学）についての学（人類学）anthropology of the changing discipline（anthropology of anthropology）という性格を帯びる。

上記(2)で言う工学系学問とは、デザイン工学、人間中心設計（HCD）、UX など、複数の呼び名が重なり合った領域を指す。工学系学問を考察の対象として取り上げる理由は、人類学とは異なる志向性をもつ学問領域――いかに(how)効率的に世界を回すかを問うのが経営マインドであるとすれば、それを数字やモノに落とし込むエンジニアマインドをもつ学問領域――の１つであるからであり、かつ、エスノグラフィを手法として部分的に摂取・援用する動向が見られるからである。

人類学的な知や手法が社会（実務世界）に貢献しつつその領域を拡張していこうとするならば、事業にエスノグラフィを応用している企業が増えつつあり、それと密接で、かつエスノグラフィを一部として摂取している工学系学問もある、といった布置のなかで、人類学（者）が実社会にどのようにコミットメントしていくかということが問題になる。そしてそれは、産業界・ビジネス界や工学系学問などの（人類学の）外部環境を考慮に入れた人類学教育ないし人材育成（社会にどのような見識をもった人類学の卒業者・修了者を送り出すか）を検討することに繋がる。

人類学の教育・人材育成に関して言えば、一部の開発人類学者を例外として、現在の人類学者（大学教員）のほとんどは、自身の受けてきた旧来型の徒弟制モデルの教育（学問人＝人類学者の再生産モデル）を反復しているにすぎず、人類学を取り巻く今日的かつアクチュアルな文脈を必ずしも直視できていないと考える。人類学を学んだ卒業生や修了生のほとんどが一般企業で職を得るのであり、かれらを社会（実務世界）に送り出す以上、卒業生・修了生の持つべき人類学的素養やスキルというものを再検討する必要があるということである。すでに米国や英国の人類学ではビジネス実務を念頭に置いたスキル開発――必ずしも日本でその追随をせよというものではないが――について議論が始まっている。人類学者の再生産だけではない、人類学教育・人材育成の新たなモデルを検討する、プラクティカルな意義も本研究は持ち合わせている。

３．研究の方法

(1)企業におけるエスノグラフィの事業化に関する調査と分析：

エスノグラフィをサービスとして提供している企業や企業研究所の研究者や実務者らへのインタビューを実施すると共に、それらの研究者や実務者らの発信する論文やレポートの内容分析を行う。加えて、実務的に企業と共同研究を行い、その関わり合いのなかで、企業が何を求めて人類学的手法（エスノグラフィ）を用いようとしているのか、また、いかに自社の業務に適合するようにエスノグラフィをカスタマイズしようとしているのか、その諸特徴を抽出する。

企業によって取捨選択された実務としてのエスノグラフィは、我々人類学者の思うそれとは大きく異なり、カスタマイズされ、定型化・パッケージ化されている。時間的プレッシャーや金銭的なコストなどの制約があるなかでエスノグラフィが導入されるという、企業の論理・ビジネスの論理がそこには関わっている。さらに、日本企業では、その経営の諸特質から、北米のように人類学の博士号保持者をハントしてくるのではなく、社員（エンジニアら）に人類学的エスノグラフィのエッセンスを習得させ、実務と統合させる（内部化）というやり方が多々見られる。この調査を更に推し進め、同時に、実務的企業との共同研究の関わりあいの中から、人類学への企業側の潜在的なニーズを解明する。

⑵工学系学問におけるエスノグラフィの応用をめぐる調査と分析：
先述のように、工学系学問では、エスノグラフィを部分的に摂取し、援用している動向が見られる。ただし、デザインの上流工程にエスノグラフィは位置づけられ、コンセプトの獲得手法（ペルソナ、シナリオ手法）や解決案の作成手法（プロトタイピング、アクティングアウト）などと組み合わせられて用いられる。それらについて具体的な事例調査から比較・検討を行う。
⑶変わりゆく学についての学という視角から検討する人類学の教育・人材育成：
エスノグラフィを事業化している企業（ビジネス実務）があり、それと密接で、かつエスノグラフィを一部として摂取している工学系学問もある、といった近年の社会的状況に鑑みて、現実社会にコミットメントしていく人類学コースの卒業者や修了者をどのように輩出するかという課題を、上記⑴⑵の分析結果と照らし合わせながら検討する。
数十年前に今日の人類学の姿を誰も想像できなかったように、人類学が何を問い、応えるのかは将来にひらかれている。近未来の人類学のカタチの可変性と可能性を想像しつつ、人類学の教育のあり方を検討する。

４．研究成果
成果は、後述の論文や学会発表へと結実している。IUAES や SfAA などの国内・海外（北米・欧州）の人類学系学会・国際会議のみならず、経営学系の雑誌など、異分野の媒体にも積極的に成果を発表した。
また、国内外の企業研究者・実務者らとの議論も深めた。例えば、20 年以上にわたって米国大手自動車会社の研究開発部門で働いた経験をもつ実務系人類学者（E. Briody 博士）を招へいしたビジネス人類学のセミナーを大手電気通信メーカー研究所の研究者らとともに組織・開催し、人類学のみならず広いオーディエンスに向けて議論を喚起した（2017/03/24, 2018/03/27）。

【国際連携】
継続的に意見交換を行っている英国ランカスター大学やロンドン大学 UCL のスタッフらと適宜連絡をとり、研究を進めた。
今後に繋がる特筆すべき展開として、Global Business Anthropology Summit がある。ウェイン州立大学の人類学者 Allen Batteau 教授らと IUAES や SfAA などの機会を通じてやりとりを重ねるなど、ビジネス人類学の国際的なネットワーク作りに関与した。それは、米国内外から約 70 名が参加（米国以外では、欧州から 6 名、中南米から 2 名、日本からは 3 名が参加）した、第 1 回 Global Business Anthropology Summit（2018 年 4 月、於 デトロイト）に結実した。第 2 回以降の実施計画も進んでいる。

【工学系分野との協働】
デザイン工学系（HDC/UX）の分野で傑出している千葉工業大学の研究者、および企業実務者らとともに、AI を用いた転職斡旋サービスや疾病管理ツールなどを事例とした分野横断的な共同研究（その組織づくり）に着手し始めている。

【新たな対象へ：医療・医療者教育】
本研究は人類学を取り巻く外部と人類学との関係をメタレベルで考察しつつ、将来の人類学のあり方の可変性と可能性を示すことが目的であった。今後はそれを、医療・医療者教育を対象としても追究する（2018 年採択「人類学の外部から考える人類学の可変性と可能性：医学教育をめぐる協働の現場から」基盤研究(B)、研究代表者 伊藤泰信）。これは本研究と同様の問題意識（とりわけ上述⑶）の拡張・展開として位置づけられる。

５．主な発表論文等
〔雑誌論文〕（計 14 件）
①Takashi Onoda, Yasunobu Ito, ″Improving Scientists’ and Coordinators’ Incentives for Service in Academia: The Ethnographic Analysis of Epistemic Cultures in a Japanese Public NMR Facility″, Organizational Cultures: An International Journal, 17(3), 査読有, pp. 27-41, 2017
②伊藤泰信「エスノグラフィを実践することの可能性――文化人類学の視角と方法論を実務に活かす」（特集／現場の実践に関わることの意味）『組織科学』51(1), 査読有, pp. 30-45, 2017
③Eric Nelson Bailey, Yasunobu Ito, ″Livestreaming for User Testing Context-Rich Observation of Game Player Behavior″, 24th Annual Conference Proceedings, International Conference on Management Science & Engineering, 査読有, pp. 228-237, 2017
④Takashi Onoda, Yasunobu Ito, ″Working Motivations of Service in Academia: The Ethnographic Study of Epistemic Cultures in a Japanese Public NMR Facility″, Proceedings of PICMET ’17: Technology Management for Interconnected World, 査読有, pp. 126-131, 2017
⑤Shuji Sudo, Yasunobu Ito, “An Analysis of the Service Ecosystem of the Japanese Pay-television Industry from the Perspective of Service Dominant Logic”, Proceedings of PICMET ’17: Technology Management for Interconnected World, 査読有, pp. 830-839, 2017
⑥小野田敬・伊藤泰信「自立するコアファシリティをめざす公的研究開発機関における研究支援施設――NMR（核磁気共鳴）施設についての事例研究」『研究・イノベーション学会 年次学術大会講演要旨集』31, 査読有,

pp. 340-344, 2016
⑦Emiko Adachi, Yasunobu Ito, Katsuhiro Umemoto, ″Managing Knowledge in a Scientific Paper Writing System: A Case Study of the PHENIX Collaboration″, Knowledge Management: An International Journal, 16(2), 査読有, pp. 21-30, 2016
⑧Kazuya Hayakawa, Yasunobu Ito, ″Diversity of Reactions among Local People upon Commercialization of Traditional Knowledge under Intellectual Property Rights Systems″,, Proceedings of PICMET '16: Technology Management for Social Innovation, 査読有, pp. 1495-1505, 2016
⑨Yasunobu Ito, ″'Ethnography' in Japanese Corporate Activities: A Meta-anthropological Observation on the Relationship Between Anthropology and the Outside″, H Nakamaki, K Hioki, I Mitsui, Y Takeuchi (eds) Enterprise as an Instrument of Civilization: An Anthropological Approach to Business Administration. Springer, 査読有, pp. 55-72, 2016
⑩伊藤泰信「民族誌なしの民族誌的実践――産業界における非人類学的エスノグラフィの事例から」(2014 年度九州人類学研究会オータムセミナー報告「ホームでの／民族誌としての応答」飯嶋秀治・山路勝彦・増田研・伊藤泰信・宮岡真央子),『九州人類学会報』第 42 号, 査読無, pp. 17-21, 2015
⑪Miwa Nishinaka, Katsuhiro Umemoto, Yasunobu Ito, ″Crosscultural Knowledge Management: A Case Study of IT Offshoring in Company A″, Knowledge Management: An International Journal, Volume 15, Issue 1, 査読有, pp. 1-20, 2015
⑫山口宏美・勝木達夫・伊藤泰信・酒井有紀・佐藤俊一「外来心臓リハビリテーションにおける多職種協働を促すカンファランスの実践」,『心臓リハビリテーション (JJCR)』第 20 巻, 第 1 号, 査読有, pp. 205-210, 2015
⑬足立枝実子・伊藤泰信・梅本勝博,「大型加速器を用いた大規模物理学実験におけるナレッジマネジメント」,『研究・イノベーション学会 年次学術大会講演要旨集』30, 査読有, pp. 588-589, 2015
⑭足立枝実子・伊藤泰信・梅本勝博「大型加速器を用いた大規模物理学実験における論文生産システムと報奨」,『研究・技術計画学会 年次学術大会講演要旨集』29, 査読有, pp. 638-641, 2014

〔学会発表〕(計 44 件)
①伊藤泰信「現場の課題や消費者ニーズを“エスノグラフィ”する ―― 文化人類学の実務への活用可能性」, FUNTEC フォーラム, 福井商工会議所ビル (福井県福井市), 2018/01/24
②伊藤泰信「ビジネスエスノグラフィの可能性 ――文化人類学を実務に活かす」, いしかわ繊維大学上級講座 (マネジメント支援講座), 石川県地場産業振興センター新館 (石川県金沢市), 2017/11/14
③小野田敬・伊藤泰信「公的研究基盤施設において施設の外部共用を行う科学者・技師の認識的文化」, 科学技術社会論学会第 16 回年次研究大会, 九州大学 馬出キャンパス (福岡県福岡市), 2017/11/26
④伊藤泰信「医学教育カリキュラムの改訂と人類学の取り組みの今後」, 北陸人類学研究会第 143 回例会 (文化人類学会北陸地区研究懇談会), JAIST 金沢駅前オフィス (石川県金沢市), 2017/11/05
⑤小野田敬・伊藤泰信「公的研究機関における研究基盤施設が行う外部共用――サービス・ドミナント・ロジックの視点から」, 研究・イノベーション学会第 32 回年次学術大会, 京都大学 吉田キャンパス (京都府京都市), 2017/10/28
⑥Eric Nelson Bailey and Yasunobu Ito, ″Live Streaming Changes Video Game Testing: Observing Contextual Player Behavior over Video Streaming Services″, Annual Meeting of the Society for Social Studies of Science (4S), Sheraton Boston Hotel, Boston, Massachusetts, US, 2017/09/01
⑦Yasunobu Ito, ″The processes and consequences of the appropriation of ethnography into Japanese industry″ (S6_13 Branding and narratives of corporate identity), The 15th EAJS International Conference, Faculty of Social Sciences and Humanities (FCSH) of the Universidade NOVA de Lisboa, Lisbon, Portugal, 2017/08/31
⑧Eric Nelson Bailey and Yasunobu Ito, ″Live Streaming Changes Video Game Testing: Observing Contextual Player Behavior over Video Streaming Services″, 2017 International Conference on Management Science and Engineering (ICMSE 2017), Japan Advanced Institute of Science and Technology, Nomi, Ishikawa, 2017/08/18
⑨伊藤泰信「医療人類学とは (概説)」, MEDC 第 65 回医学教育セミナーとワークショップ ワークショップ 6「症例検討会による行動科学・社会科学の教育―― 医療人類学の場合」, 岐阜大学医学部 (岐阜県岐阜市), 2017/07/22
⑩Takashi Onoda, Yasunobu Ito, ″Working Motivations of Service in Academia: The Ethnographic Study of Epistemic Cultures in a Japanese Public NMR Facility″, PICMET '17 Conference: Technology Management for Interconnected World, Portland Marriott Downtown Waterfront, Portland, Oregon, USA, 2017/07/12
⑪Shuji Sudo, Yasunobu Ito, ″An Analysis of the Service Ecosystem of the Japanese

Pay-television Industry from the Perspective of Service Dominant Logic", PICMET '17 Conference: Technology Management for Interconnected World, Portland Marriott Downtown Waterfront, Portland, Oregon, USA, 2017/07/11
⑫伊藤泰信「エスノグラフィとは何か、なぜ必要か」,第5回 JAIST 金沢駅前セミナー「見えないニーズを探るエスノグラフィ」, JAIST 金沢駅前オフィス (石川県金沢市), 2017/06/19
⑬大戸朋子・伊藤泰信「人類学者と企業研究所との協働をめぐって(2)―― 企業内エスノグラファーの視点から」, 日本文化人類学会第51回研究大会, 神戸大学 鶴甲第一キャンパス (兵庫県神戸市), 2017/05/28
⑭伊藤泰信・大戸朋子「人類学者と企業研究所との協働をめぐって(1)――アカデミック人類学徒の視点から」, 日本文化人類学会第51回研究大会, 神戸大学 鶴甲第一キャンパス (兵庫県神戸市), 2017/05/28
⑮伊藤泰信「概説――医療人類学とは」, 第8回日本プライマリ・ケア連合学会プレコングレスワークショップ24 「医療人類学の知見をレンズに総合診療/家庭医療の実践を深める――大学の総合診療から僻地の地域医療まで」, 高松シンボルタワー BB スクエア (香川県高松市), 2017/05/12
⑯Yasunobu Ito, "The formation of a business trend: how ethnography infiltrated the Japanese business scene in the 2000s" (Enterprise anthropology: conflict resolution in business communities), MO(U)VEMENT: A joint inter-congress/conference of the International Union of Anthropological and Ethnological Sciences (IUAES) and Canadian Anthropology Society (CASCA), University of Ottawa, Canada, 2017/05/06
⑰伊藤泰信「ビジネスエスノグラフィ概観――日本への導入と普及および協働をめぐって」, JAIST イノベーションデザインセミナー (後援：日本文化人類学会課題研究懇談会「応答の人類学」研究会)「ビジネスエスノグラフィの実践と理論――企業エスノグラファと人類学者との更なる協働に向けて」, JAIST 東京サテライト (東京都港区), 2017/03/24
⑱大熊裕太・伊藤泰信「日本における産業系エスノグラフィ概観――過去15年の経緯をめぐって」, 第3回まるはち人類学研究会 (特別企画：北陸先端科学技術大学院大学の大学院生・若手研究者との交流セミナー)・第139回北陸地区研究懇談会 (北陸人類学研究会) 例会, 北陸先端科学技術大学院大学 (JAIST) (石川県能美市), 2016/11/26
⑲小野田敬・伊藤泰信「自立するコアファシリティをめざす公的研究開発機関における研究支援施設――NMR (核磁気共鳴) 施設についての事例研究」, 研究・イノベーション学会第31回年次学術大会, 青山学院大学青山キャンパス (東京都渋谷区), 2016/11/06
⑳伊藤泰信「人類学者による症例へのコメント――医療のロジック、生活世界のロジック」, 日本プライマリ・ケア連合学会第13回秋季生涯教育セミナーワークショップ「症例検討会で医療人類学×家庭医療学/地域医療学！」, 大阪科学技術センター (大阪府大阪市), 2016/11/06
㉑伊藤泰信「実験系ラボをつぶさに観察する――文化人類学的ラボラトリー=スタディーズの視点」, 第3回 新学術領域研究「動的秩序と機能」若手研究会, 加賀観光ホテル (石川県加賀市), 2016/10/12
㉒Kazuya Hayakawa, Yasunobu Ito, "Diversity of Reactions among Local People upon Commercialization of Traditional Knowledge under Intellectual Property Rights Systems", PICMET '16 Conference: Technology Management for Social Innovation, Waikiki Beach Marriott Resort & Spa Honolulu, Hawaii, USA, 2016/09/05
㉓Emit Adachi, Yasunobu Ito, "Hidden Cooperative Specialization in a High Energy Physics experiment", 4S/EASST Conference, Centre de Convencions Internacional de Barcelona (Barcelona International Convention Centre), Barcelona, Spain, 2016/09/02
㉔伊藤泰信「医療人類学とは」第7回日本プライマリ・ケア連合学会プレコングレスワークショップ9 「医療人類学の知見をレンズに家庭医療の実践を深める」, 台東区民会館 (東京都台東区), 2016/06/10
㉕山口宏美・伊藤泰信・小山美雪・蓮井静香・勝木達夫「糖尿病透析予防指導管理のための多職種協働の困難――疾病管理 MAP を用いた3年間の指導結果から」, 第59回日本糖尿病学会年次学術集会, みやこめっせ (京都府京都市), 2016/05/19
㉖Yasunobu Ito, "Ethnography as a tool for identifying customers 'covert needs'?" (Future of Enterprise Anthropology: Fieldwork in business research, IUAES Commission on Enterprise Anthropology), IUAES (International Union of Anthropological and Ethnological Sciences) Inter-Congress, Hotel Dubrovnik Palace, Dubrovnik, Croatia, 2016/05/06
㉗Hiromi Yamaguchi and Yasunobu Ito, "Compartmentalization and Collaboration: An Ethnographic Study for Preventing the Progression of Diabetic Nephropathy in Japan", The 76th Annual Meeting, Society for Applied Anthropology (SfAA), Westin Bayshore, Vancouver, BC, Canada, 2016/04/02
㉘Yoshiko Higuchi and Yasunobu Ito, "From Surviving to Thriving: Development of

Nepalese Ethnic Business in Japan″, The 76th Annual Meeting, Society for Applied Anthropology (SfAA), Westin Bayshore, Vancouver, BC, Canada, 2016/04/02
㉙Yasunobu Ito, ″On Business Ethnography: Anthropological methods for identifying customers hidden needs″, JAIST International Symposium on Knowledge Science, Shiinoki Cultural Complex, Kanazawa, 2016/03/14
㉚Emiko Adachi, Yasunobu Ito, Katsuhiro Umemoto, ″Competition and Cooperation in a Big Science Project″, Annual meeting of the Society for Social Studies of Science (4S), Sheraton Downtown, Denver, Colorado, 2015/11/14
㉛伊藤泰信「『事例１人工物が体につくことの意味』へのコメント――ナラティヴ、コミュニケーション、非対称の関係性」, 日本プライマリ・ケア連合学会第 11 回秋季生涯教育セミナーワークショップ「症例検討会で家庭医療学×医療人類学！」, 大阪科学技術センター（大阪府大阪市）, 2015/11/08
㉜足立枝実子・伊藤泰信・梅本勝博「大型加速器を用いた大規模物理学実験におけるナレッジマネジメント」, 研究・技術計画学会第３０回年次学術大会, 早稲田大学西早稲田キャンパス, 2015/10/11
㉝Yasunobu Ito, ″Ethnography in the corporate village in Japan: Anthropological methods for identifying customers hidden needs″, The 10th Biyani India-Japan Bilateral Conference (BICON-2015), Biyani Girls College, Jaipur, India, 2015/09/24
㉞伊藤泰信「行動観察×デザイン×エスノグラフィ――文化人類学者=エスノグラファーの視点」, イノベーションデザインセミナー「行動観察×デザイン×エスノグラフィ」（松波晴人・前川正実・伊藤泰信）, 北陸先端科学技術大学院大学（JAIST）東京サテライト（東京都港区）, 2015/08/30
㉟足立枝実子・伊藤泰信「大型加速器を用いた大規模物理学実験グループにおける組織マネジメントと内部コンフリクト」, 科学技術社会論学会第 14 回年次研究大会, 東北大学川内南キャンパス（宮城県仙台市）, 2015/11/22
㊱伊藤泰信「異分野協働の実践と課題――文化人類学徒のメモランダム」, JST/RISTEX 平成 28 年度新領域研究開発領域「Future Humanity」第１回検討ワークショップ, JST 東京本部（東京都千代田区）, 2015/06/29
㊲伊藤泰信「人類学教育と応答性――人類学者の再生産モデルを超えて」(分科会代表者：伊藤泰信「人類学教育と応答性――人類学者の再生産モデルを超えて」), 日本文化人類学会第 49 回研究大会, 大阪国際交流センター（大阪府大阪市）, 2015/05/30
㊳伊藤泰信「社会人・企業人教育と応答性――非人類学的エスノグラフィとの関係から考える」(分科会代表者：伊藤泰信「人類学教育と応答性――人類学者の再生産モデルを超えて」), 日本文化人類学会第 49 回研究大会, 大阪国際交流センター (大阪府大阪市), 2015/05/30
㊴Tomoko Oto, Yasunobu Ito, ″Tacit Norms and Hidden Rivalries in ‘Fujoshi’ Communities: An Ethnography on Fan Fiction Activities in Japan″, The 75th Annual Meeting, Society for Applied Anthropology (SfAA), Omni William Penn Hotel, Pittsburgh, PA, 2015/03/26
㊵Yoshiko Higuchi, Yasunobu Ito, ″Ethnic Entrepreneurship and Social Network: An Ethnographic Study of the Nepalese Community in Japan″, The 75th Annual Meeting, Society for Applied Anthropology (SfAA), Omni William Penn Hotel, Pittsburgh, PA, 2015/03/27
㊶Hiromi Yamaguchi, Yasunobu Ito, ″Interprofessional Work for Preventing the Progression of Diabetic Nephropathy: Focusing on Medical Information Tools and Health Care Fees in Japan″, The 75th Annual Meeting, Society for Applied Anthropology (SfAA), Omni William Penn Hotel, Pittsburgh, PA, 2015/03/28
㊷Emiko Adachi, Yasunobu Ito, Katsuhiro Umemoto, ″Managing a Collaborative Scientific Paper Writing System in a Big Science Project: A Knowledge Management Case Study of an Experimental Physics Research Group″, The Fifteenth International Conference on Knowledge, Culture, and Change in Organizations, University of California at Berkeley, Berkeley, USA, 2015/02/19
㊸伊藤泰信「文化人類学の観点から『＋α』の教育を考える」,「日本語教育・留学生教育における日本型『知の技法』の活用に関する研究」研究チーム主催ワークショップ, 九州大学箱崎キャンパス 21 世紀交流プラザ（福岡県福岡市）, 2015/02/07
㊹伊藤泰信「人類学教育を通して社会に応答する(2)：社会人・企業人教育をめぐって」, 第 17 回応答の人類学研究会+科研第３回研究会「人類学教育を通して社会に応答する―時代のなかの人類学」, 早稲田大学西早稲田キャンパス（東京都新宿区）, 2015/01/30

６．研究組織
(1)研究代表者
伊藤　泰信（ITO YASUNOBU）
北陸先端科学技術大学院大学・先端科学技術研究科・准教授
研究者番号：40369864